石川県立野々市明倫高校

進学実績の向上

進路指導課と学年団が連携して指導改善を推進し、過去最高の進学実績を実現

変革のステップ

背景と課題

- 学年ごとに目標や取り組みが異なり、大学進学実績が安定しなかった
- 生徒の進路意識に課題があった

実践内容

- **進路指導課と学年団の連携**

進路への意識づけ　生徒が広い視野を持ち、全国の大学から進学先を選べるよう、進路プログラムを充実させた

模試データの活用　ベネッセの「進研模試」などのアセスメントの結果分析を強化し、指導改善に反映させた

国公立大学の個別学力検査対策を強化　3年次6月から、最難関国公立大学志望者を対象に、全校体制で記述・論述問題の添削指導を開始した

- **「思考する授業」の推進**　全教科・科目の授業にアクティブ・ラーニングを導入した

成果と展望

- 全校体制で指導改善に取り組めるようになった
- 生徒の進路意識や学力が向上し、進学実績が躍進

本当に進みたい大学を選べるよう、生徒の視野の拡大を目指す

石川県立野々市明倫高校は、同県中部に位置する野々市市で最初に設立された県立高校だ。文武両道を尊ぶ活気ある学校として、地域から信頼されているが、以前は学年ごとに進路目標や取り組みに違いがあり、進学実績も学年による差が小さくなかった。また、積極的に上位の大学を目指そうという生徒の進路意識に課題があり、学力があるにもかかわらず、低学年次に模試で合格圏内と判定された、地元の私立大学に目標を定めてしまう生徒もいたという。そこで、2014年度入学生の学年から、進路指導課と当時の1学年主任（現・同県立金沢西高校

PROFILE

校名は、金沢藩の藩校「明倫堂」に由来する。校訓は「聡（さと）く、正しく、逞（たくま）しく」。全教室にプロジェクターを設置し、ICTを活用したアクティブ・ラーニングに力を入れている。部活動が盛んで、男子ソフトボール部などが全国大会で活躍している。

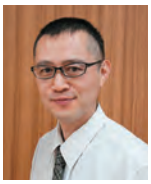
設立	1983（昭和58）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約280人
2017年度入試合格実績（現浪計）	国公立大は、北海道大、東北大、富山大、金沢大、名古屋大、富山県立大、石川県立大などに74人が合格。私立大は、青山学院大、明治大、立命館大などに延べ537人が合格。
住所	〒921-8831　石川県野々市市下林3-309
電話	076-246-3191
Web site	http://www.ishikawa-c.ed.jp/~meirih/

主幹教諭）が連携し、指導改善を推進し始めた。

最初に取り組んだのは、1年次での進路意識の向上だ。進路指導課では、「国公立大学志望者の割合を学年の80％にする」という目標を打ち出し、それを実現するための取り組みを、学年団とともに工夫した。例えば、以前は6月に進路希望調査を行っていたが、生徒が全国の大学・学部やそこで学べる学問などについてある程度の知識を身につけ、学びたい学問の方向性を十分に考えてから調査を受けられるよう、9月に変更。1学期と夏季休業期間を通して、進路説明会や大学・学部調べといったプログラムを充実させることにした。また、目的意識を持って文理選択に臨めるようにしたいという思いもあった。さらに、調査用紙も改編。選択肢として示す大学・学部のリストを、県内や近隣県の私立大学を記載したものから、全国の国公立大学を中心としたものへと改めた。進路指導課長の中田修一先生は、当時を次のように振り返る。

「低学年次に私立大学を目標にすると、生徒は力を入れる教科・科目を絞ってしまい、結果的に一層進路選択の幅を狭めてしまいます。また、進級・卒業にかかわる教科の学習が疎かになることもあります。まずは国公立大学に目を向け、受験に必要な5教科の学習に集中してほしいと考えました」

石川県立野々市明倫高校
竹中隆司 たけなか・たかし
教職歴31年。同校に赴任して2年目。主幹教諭。教務課長。「教師の仕事は、生徒の底知れぬ可能性を引き出してあげること」



石川県立野々市明倫高校
中田修一 なかた・しゅういち
教職歴28年。同校に赴任して4年目。進路指導課長。「教育に関するすべての答えは学校にある。生徒の声を聞くため、常に現場に立つ」

石川県立野々市明倫高校
杉本憲子 すぎもと・のりこ
教職歴29年。同校に赴任して10年目。3学年主任。「『人材』を育てるのではなく、『人間』を育てる」

石川県立野々市明倫高校
辻 将太 つじ・しょうた
教職歴10年。同校に赴任して6年目。「『10対10』。学習も部活動も本質は同じ。どちらも全力で頑張らせたい」

主体的な学習集団の形成を進め、生徒同士が切磋琢磨する環境を整備

次に、1・2年次での基礎学力の完成を目指し、学習指導も工夫した。どの生徒も学習内容をすべて理解できる授業を目指して指導の質の向上を図り、効率よく復習できるよう、週末課題の問題を精選した。また、進路指導課の提案により、ベネッセの「スタディーサポート」や「進研模試」の結果分析を強化。学習内容の定着に不安がある生徒が多い分野・単元を洗い出し、指導に反映させることにした。特に課題が見られる教科・科目では、進路指導課から担当教師に、手厚く解説してほしい分野・単元を具体的に示しながら、今後の指導を検討した。

「最初に率先して行動する教師がいるからこそ、新しい取り組みが学校に根づいていきます。そこで、提案者である進路指導課が主導することにしました」（中田先生）

生徒には、アセスメントの受験日の放課後に自己採点し、どこができなかったのか、それはなぜなのかをしっかり見直すよう指導し、振り返りの習慣化を図った。また、担任は採点用紙を回収して、それを基に、教科・科目の担当教師が、すぐに結果の分析に着手することにした。早期に、生徒の課題を反映させた指導を行うためだ。14年度入学生を3年間担任した数学科の辻将太先生は、次のように述べる。

「進路指導課からは、卒業生の成績推移から算出した、模試各回の成績の目安や学年の目標なども示されました。それらに基づいて、中・長期的な展望を描きながら、目の前の生徒を伸ばす取り組みを形にしていきました」

主体的な学習集団の形成も1年次から重視し、部活動が休みになる定期試験前の1週間は、放課後に全生徒が教室で自主学習を行う。学習しやすいよう、1人で問題に向き合う時間、友人や教師に質問できる時間といった区切りを設けた。当初は、私語をする生徒も見られたが、次第にどの生徒も集中するようになった。

2・3年次には、「エクシード」という選抜クラスを、文系・理系に1つずつ設置した。以前も選抜クラスを設ける学年があったが、それは、成績のみを基準に所属者を決めたものだったためか、生徒は選抜クラスに入ったことに満足

し、その後の学習意欲が伸び悩む傾向が見られた。そこで、エクシードクラスでは、金沢大学以上の難易度の大学を志望する成績上位者の中から、所属希望者を募ることにした。

「切磋琢磨し合える集団とすることで、高い志望を抱く生徒は、その実現に向けて一層前向きになれるでしょう。そうすれば、他クラスの生徒も刺激を受け、学年全体の活性化につながると考えました。実際、ほかのクラスには『打倒エクシードクラス』を目標に頑張る生徒が出てくるなど、よい意味で競い合う雰囲気が生まれました」（中田先生）

最難関国公立大学志望者を対象に、全校体制で個別学力検査対策を推進

3年次では、国公立大学の個別学力検査を見据え、記述・論述問題対策を強化した。4月には、全生徒への意識づけとして、記述模試を導入し、6月からは、旧帝大などの最難関国公立大学を志望する生徒を対象に、各教科・科目の個別添削指導を始めた。進路指導課では、全教師に添削指導への協力を呼びかけ、教科内で話し合って指導計画を立ててほしいと伝えた。教科・科目によっては、生徒が互いの頑張りや成果などを共有する場を定期的に設け、学習意欲のさらなる向上を図った。

以前はセンター試験対策に重点を置き、その結果が出てから、記述・論述問題対策を本格化させていたが、個別学力検査での得点が伸び悩む生徒が少なくなかった。また、担任は、生徒が対策を必要としているかどうかを把握し、対策を希望する生徒一人ひとりに対して、各教科・科目の担当教師に対策を依頼していたため、担任への負担が大きかったという。

「教師1人では、個別学力検査のための指導を充実させようとしても難しいと思います。そこで、先生方が一丸となれるよう、体制を整えていきました」（中田先生）

「書く」を中心に、生徒の考えを深める「思考する授業」

大学入試改革への対応にも力を入れている。「思考する授業」（図1）として、全教科・科目でICTを活用しながら、グループ協議やプレゼンテーションなどを取り入れたアクティブ・ラーニングを進めている。特に重視するのは、生徒が自分の意見を書くことだ。国語のある授業では、毎時間いくつかのグループに発表させ、その内容をプロジェクターで表示し、それを参考にしながら、一人ひとりが自分の記述を振り返り、思考を深める時間を設けている。教務課長の竹中隆司（たかし）先生は、次のように話す。

「思ったことを自由に書いてみるように伝えると、引っ込み思案な生徒でも、文章では積極的に意見を述べます。『書く』を中心に据えることで、生徒の授業への意欲を引き出せるだけでなく、個別学力検査対策にもつながると考えました」

この取り組みを推進する原動力となったのは、各教科・科目の若手教師を中心に20人ほどが所属する「アドホック・チーム」だ。メンバーが「思考する授業」を積極的に公開すると、生徒が進んで発表したり、真剣に考えたりする姿を目のあたりにするためか、次第にアクティブ・ラーニングに意欲的になる教師が増えていったという。17年度からは、全教師が行ってきた年1回の研究授業において、必ず「思考する授業」を実践し、その指導のノウハウを全校で共有することにした。その様子をビデオで撮影し、事後の検討会の資料に用いる。

「教師の問いかけの工夫によって、生徒の思考は深まります。研究授業や検討会を通して、そうした発問力が高まれば、授業が一層充実していくに違いありません」（竹中先生）

また、生徒が「思考する授業」で身につけた、書く力や話す力などをさらに生かせるよう、推薦入試の指導改善にも力を注ぎ始めた。小論文・面接指導に、管理職も含めてより多くの教師がかかわることにし、生徒には、「お世話になった先生には合否を必ず報告しなさい」と伝えている。合格の知らせを聞いた教師はよりよい指導を目指し、残念な報告を受けた教師は指導の改善を検討しているという。

「大学入試改革の進展に伴い、推薦入試の変化も進んでいます。所定のテーマに対して、根拠を示しながら反論したり、主張を展開したりする力の育成が一層必要になっていると

実感する教師を増やし、指導改善への意識を高めていきたいと考えています」（中田先生）

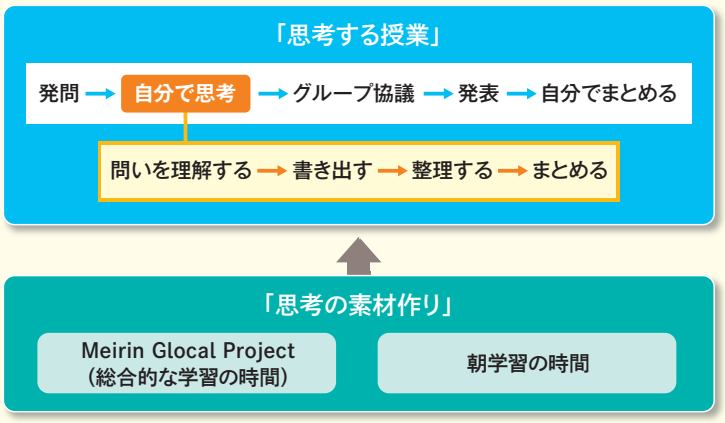
地域の課題への探究を通して、学問と社会との関連を意識させる

「思考する授業」で育成を目指す力は、簡単には身につかないため、それを支える取り組みを2つ設けている。1つは毎日の朝学習で、1年次に新聞のコラムを教材とし、①記事中の重要語句の意味を調べる→②記事を要約→③記事の感想を書く→④感想の発表、という日替わりプログラムに取り組んでいる。朝学習には、以前は読書の時間を設けていたが、個別学力検査対策の強化やアクティブ・ラーニングの推進に応じて、文章の作成・発表を行うことにした。

もう1つは、2年次の「総合的な学習の時間」に地域の課題を探究する「Meirin Glocal Project」だ。15年度に、市内飲食店との新メニューの共同開発や、商店街でのインタビュー調査といった試行を経て、16年度から本格化した。同年度2年生（現3年生）は、同じ学問に関心を持つ者3～4人がグループになり、近隣の公共機関や企業などを訪問し、その進化・発展のプロセス、課題と改善案などをレポートにまとめて発表した。この学年を1年次から担当する3学年主任の杉本憲子（のりこ）先生は、こう語る。

「答えのない問いと向き合うことで、生徒は思考力を高めていくでしょう。また、学問と社会とのかかわりに気づき、その学問を学びたい理由を具体化してほしいという思いもありました」

図1　2017年度「思考する授業」の概念図



＊学校資料を基に編集部が一部改編

進路目標を高く持ち、挑戦し続ける生徒たち

一連の取り組みの成果は進学実績の躍進に結びつき、指導改善を始めた14年度入学生の学年では、17年度入試において、同校創立以来最多の国公立大学合格者数を記録し、また、複数の旧帝大現役合格者を輩出した。1年次から進路への意識づけを重ねたことが、高い目標に挑戦し続ける姿勢につながった。個別学力検査でしっかり得点できた生徒も多く、記述力や思考力の向上がうかがえる。また、「思考する授業」では、意欲的に取り組む生徒が目立つ。グループ協議などでは、入学当初は自信がなさそうに話していた生徒も、次第に堂々と自分の考えを発表できるようになるという。一方、課題は「思考する授業」への目的意識や取り組み方に、学年や教科・科目によって違いが見られることだ。

「統一した指針の下、生徒の実態に応じた工夫を行えば、より効果的な指導が実現すると思います。そこで、3年間の各時期の目標や力を入れたい取り組みなどについて、教師間の目線合わせを強化できるよう、アクティブ・ラーニングのグランドデザインの作成を検討中です」（杉本先生）

14年度入学生の学年の取り組みは以後の学年に継承され、進路指導課との連携の下、さらなる発展が図られている。今後は、生徒自身が3年間の計画を立て、それを最後までやり遂げられる「人間力」の育成を視野に入れ、全校体制で取り組みを進化させていく。

「社会で求められる力は時代とともに変化するため、指導改善は絶えず続けなければなりません。大学入試改革が進む現在であれば、我々教師には、なおさら指導の課題を早期に把握し、解決する力が必要です。生徒の成長と自己実現のために、今後も先生方と力を尽くしていきたいと考えています」（中田先生）